



ルーマニア 水墨画に挑戦!!



水墨画・・・日本人でも経験者は少ないのではないのでしょうか。墨で字を書く習字や書道には子どもの頃から親しんでいる人は多いですが、筆で絵を描く機会はなかなかありませんね。ルーマニアではこの水墨画を得意とするボランティアが、任期最後の活動として、ソバタ市とブカレスト市の2か所で一般市民を対象に水墨画の指導をしました。「水墨画」というと、実は単に墨一色で描かれた絵画ということではなく、墨色の濃淡、にじみ、かすれなどを表現の要素とした描法によるものを指すのだそうですよ。



「竹」の書き方を指導中のボランティア

2月半ばの活動は、ボランティアの赴任地であるトゥルグ・ムレシュ市のユニリヤ美術協会が主催し、近隣のソバタ市にある協会の宿泊所にて合宿形式で行われました。5日間の参加型ワークショップで、1クラス20数名。遠方から参加した人もいました。

2月末のブカレスト市のイベントでは20代から70代までの10数名が水墨画を体験しました。幅広い年齢層が日本文化に興味を持っていることが窺えます。

さて参加者の様子はどうだったのでしょうか。水墨画を初めて見る人たちは、まず墨で絵を描くことに驚きます。そして黒の濃淡だけで様々な雰囲気表現する繊細さに感心します。



取り組む姿は真剣そのもの

そしてもう一つ。水墨画の技法の中には「水張り」というものがあります。墨をつけると紙が歪みますが、その歪みが生じにくいよう、一度水に塗らした紙を板などに張り付ける手法です。紙が水に濡れると繊維の間に水が入って伸びますが、乾くと元に戻る性質を利用するのです。この「水張り」をボランティアが説明すると、参加者の皆さんはさらにびっくり。芸術技法に感銘を受けていました。水墨画はもともと中国から伝わったものですが、13世紀頃のを美術史では日本の

初期水墨画とし、この頃から日本独自の発展を遂げてきたそうです。長い長い歴史の中で日本の芸術として育まれてきたのですね。奥が深く、そして日本人も知らないことが多いことを思い知らされます。

参加者は最初は筆で線を引くことも難しい状態でした。しかし、「竹」を描く練習をしてだんだん慣れてくると、次は「自分で想像する龍の絵を描いてみよう」という課題に取り組み、次第に墨の濃淡の表現や筆遣いもとても上手になってきました。最後はそれぞれが喜んで自分の作品を持ち帰っていました。



思い思いに筆を走らせる参加者の皆さん

慣れるまで時間がかかったものの、こうした芸術作品を制作することとおして日本文化を感じてもらえたことも、現地の人たちにとって貴重な体験になったことと思います。良い思い出として心に刻んでほしいですね。

(企画開発課 日本文化発信プログラムチーム)